

2025 年度 第 2 回 亀田医療技術専門学校 教育課程編成委員会議事録

日時：令和 7 年 11 月 18 日（火） 15：00～16：30

場所：亀田医療技術専門学校 2 号館 3 階 301

出席者

教育課程編成委員

- ・ 亀田総合病院看護管理部副部長 滝口 智子
- ・ 千葉県看護協会安房地区部会役員 影山 ユウ子

専門学校教職員

- ・ 学校長 安田 友恵
- ・ 副学校長 吉田 広美
- ・ 看護学科教育主任 関根 恵子
- ・ 看護学科教育副主任 新井 淳子

欠席 鴨川市市民福祉部長 鈴木 克己

敬称略

司会：吉田副学校長 書記：片桐

委員会次第

1. 開会、資料確認

吉田副学校長が司会を務め、資料 1、2 の有無を確認。

2. 出席者の確認

委員の変更があったため、参加者が自己紹介を行った。

3. 安田学校長挨拶

地域に必要な、変化する社会に対応できる人材育成を目指し、教育課程を編成している。臨床現場が求める看護師を育てるため、基礎教育と現場のギャップを少なくしたカリキュラムを作りたいと考えているので、忌憚のないご意見をお願いしたいと挨拶した。

4. 報告

1) 本校看護学科のポリシーについて

本校の教育理念・教育目的・教育目標を提示し、学年別の教育目標について説明をした。

①学年別教育目標

カリキュラム外において看護実践者の育成として人間形成を養うことを目的とする

1 年次：心の育成を目的に「意志ある発言と行動」を教え導く

2 年次：動機づけをし「一歩前進した発言と行動」

3 年次：状況に応じて思考を表現し、自律的言動

②学生の現状

- ・ 学習面 入学時に基礎学力を持っている学生が全体の 1 割
学習習慣が身につけていない
知識と知識をつなぎ意味を持って理解し、応用して思考を整えるのは困難
コスパ、タイパを重要視し、自ら考えずに答えを求める傾向にある
- ・ 行動面 主体性や積極性が低い
困難さが多重になると言動（報告・連絡・相談・確認）が乏しくなる
先を見通す力や失敗から学ぶ力が培われておらず、自己の言動を顧みない
自分は自分と考え協調性に欠ける部分がある
- ・ 環境面 経済的な問題や親の不在、地域社会とのつながりの希薄化
「人」を理解するための時間や経験、教えや導きを得られないまま育つ
親に対して心配をかけたくないなど、相談ができない
経済的側面により海外研修に参加できない学生の増加
- ・ 価値観 「自分は自分」と個性を主張する反面、他者からの評価には敏感で繊細
承認欲求が強く、どう見られるかを気にする
上下関係よりもフラットな関係を好むが、年上の学生に流されやすい
- ・ 「看護の道へ誓い」の式典を終えて、自らの看護観を問い直し、自分のなりたい看護師像を明確にしていた。そこには患者さま・家族に寄り添うことを大切にするという考えが表れていた。
- ・ 学生は関心を持つと積極的に質問してくることもある。受け身な部分も多いが、素直さがあるので打てば響く。教員が発想や表現を工夫することで変わるのではないかと感じている。

2) 基礎教育の評価および就業先のニーズ：アンケート結果報告

①対象:本校看護学科を卒業し、亀田メディカルセンターに就職した卒後 1 年目の看護師 50 名 （回答数 29 件、回答率 58%）

結果：

- ・ 教育内容・学習支援や学習環境について 80～90%が満足
- ・ 修得したもの（看護学科教育目標 6 項目）は実践で、90%以上が役立っている。
- ・ もっと学びたかったことは、多重課題への対応、報告・申し送り、診療の補助技術
- ・ 希望する点として、成績が安定している学生へのフォロー、一人ひとりに合った勉強法を考えてほしかった。カルテからの情報収集方法、他者に助けを求められる能力等があった。

②対象：本校を卒業した 1 年目の看護師が配属されている部署の所属長 20 名（回答数 13 件、回答率 65%）

結果：

- ・ ディプロマポリシーに則った設問 11 問中、7 項目については「できる」が約 50%
- ・ 「対象の情報を把握し、全体像を捉えたうえで必要なケアを提供できる」は 2 割程度しかできていない。

- ・「患者さまだけでなく、ご家族や地域等のすべての人々が健康で安心して暮らせるように支援することができる」はできる、概ねできるが1割に満たない
- ・看護職として必要と考える能力として、人間性、看護観（適性）、コミュニケーション力、倫理観、社会人としての姿勢について特に重要と考えている。
- ・本校への期待として、社会人基礎力（ストレス耐性、人間性、コミュニケーション力、協調性、体調管理）、相手の立場に立った看護をするための学修、亀田病院への就職等が挙げられた。

5. 委員の意見

- ・ストレス耐性を高めるより、ストレスの捉え方・乗り越え方の教育が重要である。
- ・言語化、記録に残す能力の強化は必須であり、AIの活用方法を教育に導入する。
- ・観察が十分できないと、記録が作業となりアセスメントが困難となる。
- ・患者さまに関心を持つことができる人が必要。関心があれば、観察力が高まり、変化に気づいて、心のこもったケアができる。
- ・学生に看護現場を意図的に見せるなど、教育側のコーディネートも必要である。
- ・社会や看護の対象は変化し続けており、3年間で変化に対応できる学生の育成は難しい。変化に対応するための状況を捉える力、何が必要か考える力などの基礎的能力を身につけて卒業させる方が現実的である。
- ・「看護の役割を担える」という目標も抽象的なため、卒業時点で具体的にどんな姿で送り出すのかを明確にし、継続していくことで「看護の役割を担えるようになる」という形にできれば良いと考える。
- ・基礎教育3年、卒後3年を合わせ6年間での成長と考え、卒業時と卒後3年でこのような看護師になれるという具体的な姿を臨床と共有して、学校と臨床がシームレスに繋がる体制を作りたい。
- ・臨床現場でも指導者が新人看護師に対し、学習方法の向上をどう支援すべきか悩んでいる。
- ・授業を休むことに抵抗感がない学生が増えており、その傾向が就職後にも続いているのではないか。またハウレンソウ（連絡・報告・相談）の基本ができていない学生もいる。
- ・学生は自己肯定感が低いため、まずはそれを高めることが必要。

まとめ

基礎教育を行う学校と臨床の連携、教育体制を整え、今回いただいた意見を本校のディプロマポリシーやカリキュラムに反映させていきたい。

6. 次年度の予定

令和8年度第1回会議

令和8年6月22日（月）15時から16時半

亀田医療技術専門学校 2号館3階 301